

それでも車で1時間も郊外に向かえば、その光景は一転、あっという間にのどかな農村になる。すれ違う人々のはにかむ笑顔。この国には、確かに穏やかな時間が流れていた。

1965年、5人の日本人の若者がこの地に降り立った。彼らこそが第一号の青年海外協力隊。それから50年にわたり、隊員たちは日本とラオスの懸け橋となり続けてきた。

その現場を見ようと、ビエンチャンから飛行機で約1時間、北に位置するウドムサイ県へ向かった。目指すは、産業商業局の生産・マーケティングセンター。この地域では、かつて麻薬の原材料となるケシ栽培が盛んだったため、麻薬撲滅に向けた代わりの生計手段として、手工芸品作りが推奨されてきた。同センターはその小売・卸を担当している。

迎えてくれたのは、青年海外協力隊員の新井貴久さん。センター内には、植物の繊維やコットンを使ったバッグやポーチ、ストール

などが並んでいる。「8つの村の女性グループが作っています。彼女たちが暮らす山間部は街からのアクセスが悪く、農業中心の生活。手工芸品作りは貴重な現金収入源です」と説明してくれた。

大学卒業後は、金融機関で中小企業向けの融資を担当していた新井さん。さまざまな企業の経営改善に携わってきた経験でラオスで生かしたいと、お客さんがじっくり見てくれるようなディスプレイや商品を説明するポップ、宣伝用のポスターやリーフレットを作成したりなどの工夫をこれまで提案してきた。

この地にある伝統を商品に生かす

「バッグの生産者に会いに行ってみますか？」

新井さんに案内されて、がたがた揺れる山道を車で進むこと1時間半。ラオスの少数民族の一つ、カム族が暮らすマン村に着いた。そこには、また違う風景が広がっていた。伝統的な高床式の家が

並び、子どもたちは外国人が珍しいのだから、近付くときやあきやあ笑いながら逃げていく。街から離れた山岳地域だからこそ昔ながらの暮らしだ。

「この女性たちの技術はすごいんですよ」

新井さんの言葉通り、クズという植物のつるをナイフで割って繊維だけをこそげ取り、一瞬でより合わせて細いひもを作り出す。丈夫で水にも強く、軽い。それを使ってバッグを編むのだが、「簡単に見えても実際にやるととても難しいんです」と新井さん。カム族の女性たちに受け継がれてきた伝統技術なのだ。

「タカと一緒にバッグを作れて楽しいよ」

そう笑ってくれたのは、女性グループのリーダー、セーンさん。人の温かさ、地域の結び付き、自然と共に生きる力。今の私たちが失いつつあるものがラオスにはある。

新井さんが力を入れているのは、彼女たちの技術を生かし、観



いつも作業している村の憩いの場で、「クズからこうやって繊維を取るの」と見せてくれたマン村のセーンさん(左)と新井さん

共に、未来へ

青年海外協力隊が初めて派遣された国、ラオス。現地の人々と共に歩む。隊員たちのその姿勢は受け継がれ、各地で実を結んでいる。その現場を見ようと、ラオスへ飛んだ。

写真：今村健志朗（フォトグラファー、青年海外協力隊OB）



僧侶の托鉢はラオスの象徴。ビエンチャンでも朝6時半ごろから始まる

50年の歴史が始まった国へ

豊かな自然にあふれた穏やかな暮らし。ラオスといえばそんなイメージだった。ちよつと地味と言ったら怒られてしまうかもしれないが、アジアの国々の中でも「秘境」。しかし意外にも、首都ビエンチャンは都会だった。高層ビルが立ち並び、朝夕には渋滞が起きる。街角にはフランス植民地時代を思い出させるおしゃれなレストランやカフェもある。



ラオス
from **Laos**



ウドムサイ名産のコットンを使ったストール。巻くとどんな形になるかわかりやすいように写真も展示



ウドムサイの人々にも観光客にも商品を知ってほしいとリーフレットを作成。ケースも新井さんお手製だ



淡い色使いなど、日本人のセンスを取り入れて開発した商品が並ぶ。同僚のウンカム・オンバチャンさん(左)とシリウォン課長(右)

かり。体のバネを鍛える筋力トレーニングや、レシーブなどの基礎ができれば、攻撃力のあるスパイクにはつながらないのに……」そこで日本式の練習方法を参考に、基礎練習から試合形式の練習、筋力トレーニングを取り入れた。選抜選手の多くはまだ高校生。練習後に合宿所へ帰る途中、屋台に立ち寄って豆乳を飲んだり、スマートフォンに夢中だったり、その素顔は日本の高校生と変わらない。



毎回円陣を組み、気合を入れる選手たち。「国体で絶対勝つ!」とやる気だ



練習試合のビデオを見ながら反省会。選手たちが自分で考え、話し合い、作戦を練る

しかし、合宿所に着くなりテレビの前に座り込んだ。「私を含めた大人3人との練習試合を撮ったビデオを見ながら反省会をやりませ」と本間さん。疲れているだろうに、みんな真剣だ。「このフォーメーションの時、あなたの位置はここじゃないよね?」「あつ!向こうのコートのここが空いているから、狙ってスパイクを打たなきゃ!」気になる場面ではビデオを止めて、とことん話し合う。最後には「みんなでミスをなくして、改善して、頑張ろう!」と、本間さんではなく、選手の一人、ケオヴィアンペット・トラーティさんが呼び掛けた。赴任当初は、練習に時間通りに来なかったり、すぐに「疲れた」を連発したりしていた選手たち。

顔は充実感に満ちていた。隊員にも現地の人々にも笑顔があふれていたラオス。計画投資省国際協力局のサイモンカム・マンノメック副局長は、「ラオスではこれまで800人を超える隊員が活動しています。これからは彼らの活躍に期待しています」と話す。人々と同じ目線で暮らし、共に歩いていく。今までも、これからは変わらない。それが、協力隊だからこそのことだ。



青年海外協力隊
第1号
星野昌子さん
からのメッセージ

第2の人生、協力隊へ

青年海外協力隊に参加したのは1965年。戦争を経て経済大国になろうと日本がやっきになっていた時代です。海外に行くのはまだ珍しく、周りからは「協力隊って何?」という反応でした。

私の父はハワイで移民として過ごし、世界

を知っていた人。そんな環境で育った私は、数少ない女子学生として大学で学び、英語・フランス語を身に付けました。結婚・出産後に日本語教師をしていた時に偶然見かけたのが協力隊の新聞広告。「私の第2の人生はこれだ!」と思いました。

日本語教師としてラオスに赴任したものの、教室もなく生徒も集まらない。あせんとしましたが、まずはラオス語を学ぼうと気持ちを切り替えました。ラオスでは、学校の成績といった日本で評価される能力なんて関係ありません。自分の潜在能力を掘り起こし、全身全霊でできることをしないと毎日を過ごせない。彼らの生活に入り込むことが必要だと考えました。そして赴任から半年後には日本語教室の開校にこぎつきました。先には絶

対楽しいことがあるから進もう!と考えるのが私の性格なんです。

モノやカネではなく、心に価値を置くラオスの人々と過ごし、こちらが教えるなんてとんでもない、むしろ学ぶことばかりでしたよ。



技術学校の校舎を間借りし、星野さん(右奥3人目)たちが開校した日本語教室

スポーツを通して伝えたいこと

ウドムサイ県は、3年に一度、約20種類のスポーツ選手が集結する全国体育大会の舞台。県を背負う「売れる」商品作りだ。セーラーさんたちは普段からクズで編んだシヨルターバッグを使っているが、大きすぎてお土産に向かない。そこで、サイズを小さくし、染めたひもを使ってストライプ柄にするなど、新しいデザインを取り入れている。共に活動する製品開発課のマイポーン・シリウォン課長も、「より多くの消費者の目に留まる商品を作りたい。最終的には輸出を目指しています」と期待を寄せている。

もちろん、伝統を守って生きてきた村の女性たちやセンターの同僚たちにとって、新しい取り組みを始めるのはそう簡単ではない。「言葉だけで説明してもイメージがわきませんよ。まずはやって見せて、その後は現地の人たちの自主性に任せるようにしています。日本にいた時は、後輩の指導に自信が持てなかったこともありました。ラオスに来てから、待つことを覚え、大人になれた気がします」と照れくさそうに笑う新井さん。これまでなかったものを生み出す挑戦が続いている。

って戦いを繰り広げ、ラオスじゅうが盛り上がる一大イベントだ。その国体に向けて活動している隊員がいると聞き、隣のサヤプリ県に向かった。ピエンチャンから飛行機で1時間の古都ルアンパバーンから、さらに車で2時間。道路は舗装されていて快適な旅だった。

県中心部の体育館に着くと、「ハイツ!」と元気の掛け声、ボールが弾む音が聞こえてくる。学生時代の部活の時間を思い出す懐かしい音。中に入ると、女子選手がバスケット、レシーブの練習をしている。女子バレーボールの県選抜チームが合宿中だ。「ピツ!」と笛を吹いて指示を

出しているのが、青年海外協力隊員の本間唯子さん。中学から大学までバレーボールを続けた経験を生かし、海外で活動したいと協力隊に参加した。本間さんが目指しているのは、県内のバレーボール選手のレベルアップ。「赴任当初は、選手たちは練習時間にスパイクを打ってば



同僚のターヴォン・クントーンさんと共に練習する本間さん。「ユイコはとてもアクティブで頼りになる」と息もびったり